

2025年4月の総評に代えて 高橋修宏

あざらしの手つきで拍手する
きみのしゅくふくは
純白のこもれび
さいう（石川県）

「あざらし」に託した「拍手」の比喩が面白い。けっして慣習や義理などではなく、祝福の身ぶりがストレートに伝わってくるようだ。そんな瞬間を、穢れない「純白のこもれび」が受けとめている。

お祭りの屋台を解体するように
眠った むらさきいろの手招き
小池耕（東京都）

一行目「お祭り屋台を解体する」という、どこか大仰な比喩に驚かされた。その前には、何か目出たいことがあったようなイメージも伝わる。きっと「むらさきいろの手招き」には、悪夢など紛れこみそうもない。熟睡できそうだ。

その橋をわたりきれない声たちが
光るぶんまで手を振りたいよ
雲理そら（大阪府）

「わたりきれない声」とは死者か、難民か、あるいは単に届かない声か。象徴的な「橋」と相俟って、さまざまに想像させるが、二行目「光るぶんまで手を振りたいよ」という措辞から、哀しみと名づけてもよい感情さえ立ち上がる。

ことば未満の声を連れ足跡を
雪に残して飛び立った鳥
常田 瑛子（山口県）

一方、同じ声であっても、この「ことば未満の声」とは何なのだろう。「飛び立った

鳥」による人間の情緒などに還元しえない、かけがえのない何ものかなのだろうか。
「鳥」という存在の神秘性に触れるような一作。

巫女たちが一心に読むバーコード

桜庭 紀子（和歌山県）

何より、「巫女」という古代的な存在と「バーコード」との取り合わせが面白い。なるほど、今日の神社の光景としてありそうだが、「一心」と漢字表記にすることで、この一句にリアリティが宿ったのではないか。

心臓はみんな紺色で山躑躅

金光 舞（埼玉県）

血管を褒められてから菜種梅雨

檜野 美果子（宮城県）

どちらも身体、中でも臓器をキーモチーフとした俳句。表面から見えがたい身体の内部を取り上げている点は共通するものの、その趣意は異なっている。金光さんの句は「心臓」の比喩が「山躑躅」を呼び出すのに対し、檜野さんの句では時間経過の中で「菜種梅雨」が呼び出されている。前者は季語のイメージの更新を迫るのに対し、後者では季語の本意を活用している。この二者を並べ鑑賞することで、今日の季語に対するアプローチの両面がうかがえるようだ。

ことごとく雲逃げてゆき

晴天は

文字を抜かれた遺書に似ていた

石村まい（兵庫県）

「文字を抜かれた遺書」という比喩に驚かされた。たしかに、雲ひとつない「晴天」は気持良いという以上に、人によっては理由のない不安、さらには虚無を感じさせることもあるのだ。

お絵かき帳の
結婚式の花嫁さんは二人
ママが二人いる子への憧れ

あゆな（群馬県）

子どもの「お絵かき帳」に託して、今という時代の断面を切り取っている作品。たしかに、子どもによっては「ママが二人」の方が良いと感じてしまうのだろう。その子にとつて、もうパパなどいらないのかもしれない。

こすれてはふくらむ
春の便箋に
ことばは小川の加速度をもつ

川上 真央（東京都）

微細な眼差しが光る一行目、そして三行目への飛躍が美しい。「便箋」という紙の物質感が、筆記する者の運動性へと転回しながら「小川」のイメージを現前させた。

いぬざくら貴種流離譚かもしけぬ

鶯浦 るか（富山県）

「いぬざくら」は、桜という言葉があっても全く別の植物。群生の白い花を咲かせる。おそらく作者は、その言葉の不可解な命名から発想したのかもしれない。「貴種流離譚」という措辞が、さまざまな想像をうながす。